

一荷堂半水による大坂俄種本翻刻②『俄の種本』

北庄司 基 博*・佐藤 竜之介*

橋本 奏*・山野 眞未*・山口 響史*

抄録 本稿では、前稿（「一荷堂半水著大坂俄種本翻刻①『ニ〇カの種』」）に続き、大阪大谷大学教育学部における授業（崩し字学習）の成果として、一荷堂半水による大坂俄の種本『俄の種本』の翻刻を報告した。また、『俄の種本』を使用した授業の受講生の感想等から、大坂俄資料が崩し字学習に適した教材の1つであることを述べた。

キーワード 近世後期上方語、大坂俄、一荷堂半水、崩し字学習、俄の種本

1. はじめに

本稿では、前稿「一荷堂半水著大坂俄種本翻刻①『ニ〇カの種』」（以下、前稿）に続き、一荷堂半水による大坂俄の種本の翻刻を報告する。本稿における取り組みも前稿と同じく大阪大谷大学の講義「学校教育特論（言語）」の中で行われた取り組みである。

2. 一荷堂半水『俄の種本』について

一荷堂半水については、前稿（「一荷堂半水著大坂俄種本翻刻①『ニ〇カの種』」）で述べた通りである。日本語史研究における近世後期上方語資料として貴重な『謄臍の宿替』などの作者として知られている。

『俄の種本』（個人蔵）は、大坂俄の種本である。一荷堂半水著、二代目長谷川貞信（長谷川小信）の画である。長谷川小信による序文がみられるが、年号の記述はみられない。但し、表紙の「小信画」の記述、二代目長谷川貞信は、慶応元年（1865年）頃から明治8年（1875年）に父から貞信の名を譲り受けるまで、小信の名で活動していたとされている¹⁾ことを鑑みると、1865-1875年の間頃の成立だと考えられる。本文は十六丁あり、短いもので半丁、長いもので三丁ほどの俄のネタがみえる。前稿における『ニ〇カの種』と同じく、俄の種本としての利用を意識したものであり、近世後期～近代上方語の口頭語資料としての価値は高いものであると考えられるが、資料性の検討は今後の課題としたい。

3. 翻刻凡例

翻刻に際しては下記の方針で行なった。

- ① 漢字は基本的に常用漢字に直した。
 - ② ルビ、濁点、句読点は本文に則して施した。印刷不鮮明などでみえなかった部分そのまま表記している。
 - ③ 割注の部分は〈 〉で括って示す。
 - ④ 本文の右側に小書きされる音の類似を利用した言葉掛けの箇所は、該当箇所の直後に（ ）で括って示す。
 - ⑤ 虫食い、破損、印刷不鮮明などで判読できなかった場合、字数が分かる場合は字数分□で示し、字数が分からない場合は〔 〕で示す。
- ※ 本文中には、人権に関わる語彙が用いられているが、日本語学の資料としての用途を重視し、本文のままに翻刻している。

4. 翻刻

(1オ) ○時の花 〈図のごときふりにて将ぎのこまの紋つきのきものにて手にしようきののほりをもつて出てはやりうた〉

「しようきや（じやうきや）画（で、ゆく）にある、子どもが（りが）のほり（のこる）、のほり（とる）子どもが（けむりが）しばるたけ（しやくのたね）〈もんをおしへて〉ひよこ〜（とこ〜）〈せなかををしへて〉ひよこ（とこ）おひ

○闇仕合〈平井ごん八のこしらへにてぬきミをさげてあたまをおさへてにげて出て〉

*大阪大谷大学教育学部

「ア、いたい〜モフゆるせ〜己^{おれ}が(1ウ) わるかつたらしい無茶な奴らナアどこの芝居^{しばい}で見ても鈴^{すず}がもりの立まはり大勢^{おほせ}のくも助^{すけ}を合手^{あいて}にしてごん八^{あは}が勝^{かつ}のじやとおもふてゆだんしていたら一同^{いっとう}にい、合^あしくさつてどつくやらこかすやらどゑらしいめに合^あしくさつたモフ

〜こんとからとんなことがあつても権八^{ごん}の役^{やく}ハしハせぬ平井^{ひらい}(ゑらい) めにあふたしかし己^{おれ}のやうなふ男^{おとこ}で権八^{ごん}になるとハこれがほんまに(2オ) 落^{おち}「するがむり(すゞがもり)といふのじや

○愛敬神^{あいけいがみ}〈女のなりにてはいせんの水^{みづ}ばちをもつて出て

「わしもマアだれぞに惚^{ほれ}てもらふとおもふてゑろういやミしたり容易^{やす}子^こして見ても尻^{しり}ひとつひねる人^{ひと}がなくてしかし今^{いま}時にハめづらしひ(2ウ) 女子^{おんな}でモフ今^{いま}としハ三十八^{さんじゅうはち}になるけれどまだ男^{おとこ}の肌^{はだ}しらずの手^ていらずの生^{なま}正味^{じやうみ}のあら開^{ひら}じやそのはつじや此^こ方^{かた}ハすぐにさしたいけれど百^{ひゃく}だんぐらいの将^{しやう}台^{たい}といつ所^{ところ}で向^{むか}ふに合^あ手^てがないのじやしかしけふは六月^{ろくがつ}の朔^{しつ}日^{にち}で御^ごまつりじやよつて是^{こゝ}から愛^{あい}をもろてこうかトレ〜ト〈水^{みづ}はちの中^{なか}へかた足^{あし}をいれて

落^{おち}「はい洗^{せん}(あいぜん)さんへは入^いて(□いつて) こうか
○つり灯籠^{とうろう}(3オ) 〈ゆらの介^{けい}のこしらへにて酒^{さけ}のゑいのふりして手^てぬぐいをもちてさほだけをつへにてひよろ〜して出て

「めんないちどり手^てのなるハうへヤアくだまいたら(つかまへたら) 竹^{たけ}ほかそ(さけのまそ) ト〈つへをふる) ヤアめんないちどりト 〈い、つ、手^てぬぐいにてほうかむりして) 落^{おち}「手^てぬぐひほうへ(てのなるほうへ)

○一重切^{ひとへぎり}〈竹^{たけ}の花^{はな}いけをもつて出て

(3ウ) 「どなたもお望^{のぞ}みならバ今日^{こんにち}ハ見^{けん}料^{りやう}なしでうん気^きまぢ人^{ひと}ゑん談^{だん}うせ物はしり人^{ひと}なとハそく座^ざにくわしくちよつとも見^み分^{わけ}られませぬがまづ此^こ座^ざしきにて酒^{さけ}がまだのミたいか姫^{かみ}が買^かいたいかうまひ物^{もの}がくたいか金^{かね}がほしいか芝^{しば}いが見^みたいかとおもふてゑる人^{ひと}を当^あて見^みることハ大^{だい}名人^{めいじん}でござり升^{のぼ}るそれがうそならバなんなりといふて御^ごらん此^こ方^{かた}のは(4オ) 墨^{すみ}色^{いろ}や人^{にん}相^{さう}とちかふてこれでのぞいて見^み升^{のぼ}とツイ 落^{おち}「はないけ(はないき)でしれ升^{のぼ}

○部^へ家^やもどり 〈△角^{かく}力^{りき}取^{とり} 酒^{さけ}にゑいたる思^{おも}入^い ○にようぼう 女^{にようぼう}房^{ぼう})

△「か、今^{いま}もどつたゾ「ヲ、いやまたゑらふ酔^よているのじやナアどこで其^{その}やうに呑^のできたのじやエ、くさ〜
〜くさ「けふはひるきさきの旦^{だんな}那^なのところで法^{ほう}事^じによハれて精^{しやう}進^{じん}酒^{しゆ}を無^む三^{さん}向^{かう}にやらかしたら胸^{むね}がつか(4ウ) へてゲフウエ、イ○「コレ〜そんなとこへどつた

らどふもならぬアレ〜△「そのやうにいふても出^でものはれもの所^{ところ}きらはずエ、イゲフウア、づ、ないソウ背^せ中^{なか}をなで、くれ○「コレ〜お前は酒^{さけ}を呑^のむといつてもこれしやモフこれにこりて酒^{さけ}をやめてんカエ、くさ〜△「ゲフウゲロ〜〜ト(5オ) 〈へどをつく) ○「ア、きたなコリヤそうどじやそのやうに角^{かく}々^さへはい歩^{ある}いてへどついたら跡^{あと}がどふもならぬがナ△「エ、イゲロ

〜〜△「ヤア〜まだ出^でるのかやたび〜ア、くさ〜モフよけりや〜ぺん是^{こゝ}で顔^{かほ}ぢうふきんかア、きたな顔^{かほ}がへどだらけで飯^いつづぶや湯^ゆばがミな顔^{かほ}についてまことにおとましひざまじや△「なんじやへどがミな顔^{かほ}についておとましい○「ハアおとましいデエそこで斯^{かう}したところハわたしハおとわじや(5ウ) なふておとましいといふのじや△「そんならさしづめ己^{おれ}が猪^ぶ名^な川^{がわ}じやのふてへどがミなかほ(イナガハ) とハどふしやト〈これにて兩人^{ふたり}いな川^{がわ}内^{うち}ノ後^{あと}よろしくしぶりあるべし) ○上^あり「へど長^{なが}はきや(江戸^{えど}ながさきや) すミ〜へ(くに〜へ)。つきや(ゆきや) さんすりやその跡^{あと}ハ。ふくハ(のるすハ) なほさらほんなんぎ(おんなぎ) の。ひとりくさい(くよ) 〜〜とこの(もの) あんじ△ボケ「ソリヤあんじるはづじやそこらうろ〜したらへどですべるぜずいぶん氣^きをつけてふいてくれ上^あり

ほんまに(おつと) けがないやうにとト〈ふいたカミをだしてミせ) 上^あり「しほる紙^{かみ}三^{さん}(たのむかミさん) まいほとびたん(ほとけさん)(6オ) △上^あり「よ□犬^{けん}悦^{えつ}(ミ□けんさんへ) もしようじんの○ボケ「なんのこれが精^{せい}進^{しん}じやものかこれ見^みこ、にかまほこが二^に切^きもその形^{かたち}で、あるがナお前^{まへ}コリヤわしにうそをついてどこぞでおごつてきたのじやナア上^ありおごり(もどり) やさんしたかまほこ(てかほ見る) までボケこ、にはきだしてあるが△ボケ「ア、しもたゑらいこと見^みつけられたイヤ実^{じつ}ハ己^{おん}が手^て腹^{はら}でちよつと杯^{ばい}一^{いち}おごつてきたけれど

貴^きさまにえんりよして今^{いま}までかくしたことをとふどかまぼこで(6ウ) 精^{せい}進^{しん}おとした○「そんならコリヤヤ二^に向^{かう}の(まじり) 幟^{のぼり}じやないゑんりよおごりというのカ△「おまへも又^{また}へどのそうじもせずにつまらぬぐちをいふているが最^{さい}前^{ぜん}からしたことは猪^ぶ名^な川^{がわ}の内^{うち}ではなふてハ、ンこりや○△落^{おち}「ミな嫁^{かよめ}々の(いな川の) 愚^ぐち(うち)といふのじや

○素^すばなし〈このミのなりにて〔 〕と茶^{ちや}わんをもて出て

(7オ) 「まことに今^{こん}せきはすこぶる珍^{ちん}談^{だん}をうけたまはりま、た上にけしからぬ御^ご名^{めい}茶^{ちや}に美^び菓^{くわ}を下^{くだ}さりましてイヤモフなにともありがたふぞんじ升^{のぼ}ると此^こ様^{やう}にいふているとほんまかとおもふて無^む三^{さん}向^{かう}に茶^{ちや}を呑^のむくさつた

がモフさいぜんから腹がたぶ〜いふて何するのもしや
になつてこのとふりに 落「きびしやう(氣ぶしやう)
になつた

○天井板(7ウ)〈さけのよいのふりにて手にたんぽ
と茶わんをもつて〉

「イヤおれもさけかすきではじめハちよつとやりかける
がツイ夫から口まらがおへだして内で三合のミ横町の
呑やでハ三合ひつかけましたこ、でも二合のんだがそこ
で人がミなおれを見てはしご酒じや〜といふがコリヤ
落「□八合酒といふのじや

(8オ)○瀧づくし 〈き□がしはかまにてそうめんを鉢
にいれてだしとさらをそへてはしをもちて正めにすわ
り)

「おそれながら口上のもつて申上御鉢中めんいさら
がた御酒さげんのていを拝しいかばかりか恐悦しごくに
ぞんし奉り升喰たがりまして此たびふ調法じやない
大好物の素めんをくひまして瀧づくしを御覧に入升何
ぶんだしのかげんあいにござりますればたらぬところハ
い、鉢も(8ウ)とりかへて喰だし升先最初ハ津の国う
バラ郡のど(布)引の瀧でムり升ト〈だしをつけ一口
につる〜とくふ)御かげんにてあぶよくひましてム
り升る扱次なるハ日光山は面見(うらミ)の瀧でムり
升ト〈大口をあきておかしなかほをして口をよこにし
てそうめんのうらからくふ)これも味よく喰ましてムり
升是よりハ都清水にて□当ハおとがい(おとこ)の瀧
で□(9オ)ト〈[]じはらにてひつかけおとかいよ
りく[]けて見せる)さて此つぎは箕面の大瀧でムり
升ト〈たくさんにはしにかけてぐつとぐつと上のほうへ
はしをあげそうめんの中よりはなをだしてた□のこうし
つしかけをミせる)ちよつと鼻先でわれ升るが残ねん
〜是よりハト〈□□鉢のなかを見てびつくりして)ア、
こりやモフミな喰ましたゆへコリヤ紀の国那智の
たきじやないミなくひなしの瀧といふのか此やうにいふ
のがうそなら一ぺんあらためて見升ト〈からのはちを出
して見せて)どなたも 落「そうめんから(それから)
ごらうじ

(9ウ)○大口〈女ろうのこしらへにてゆもじーツのは
だかにのべがミをもつて出て)

「ア、きらいモフ来てかしらんとおもふてさつきにから
着物もぬいでゆもじーツでこのやうに紙までもんでまつ
ているのにまだきてくれぬとハエ、腹の立ことじやモ
フ〜□とふて〜すり〜してゐるのにア□しんき
ヤノそろ〜お腹もへつてきたけれどマア上口より(10
オ)下口がこたへられぬこんなこといふのハどふやら
はづかしひけれどもわたしハ近がつへじやなふて下がつ

へで此やうにまつてゐるうちにト〈ゆもじをおしへて)
ゆもじ(ひもじ)て〜どふもならぬはやう 落「まら
(ま)たべさしてんか

○探題〈このミのなりにて手にたんざくをもつてしづか
に出)

「イヤわたくしハ山家の雪といふ題にて大きに閉口いた
します清丸さんも太丸さんも(10ウ)御名吟ができま
したかなにモフわたくしばかりで外さまハミな御点作に
なりましたかヤア〜これハ〜サア〜氣がいら〜
してなほなにも出ぬハエ、腹がたつ〜ト〈たんざく
をおとして) 落「たんざくおとして(かんしやくおこ
して)いるゾ

○雪のくれ 〈[]ぎのこしらへにておきミと二人手□
ひ□で上りにつれてしづ〜いで、)

(11オ)上り「ふひんやお袖ハとほ〜と親の大事とき
くつらさ娘お□ミに手をひかれ親ハ子を杖子ハ親をは
しらんとすれと雪道にちからなく〜たどりきて垣の外
にも袖「ア、うれしやたれも見とがめハせなんだか子
「イ、エ門口に侍い衆がいねむつてゐやしやつたまにボケ
そつと走つては入てやつたけれどどいつも寝てけつかつ
て知りくさりやせぬゑらいどあほナアハ、イ〜〜袖
「コレ〜その(11ウ)やうに大きなこへしたら目をさ
まして又ほりだしにくるとわるいハヤレ〜マアこ、ま
で来たたらモフ安しんじやしかしさい前からひや〜して
腹にこらへていたよつてゑろう腹がはつてきたとふぞ^へ尻
が〜ツでるとい、のに子「ア、か、さんおまへもそう□
へ(12オ)わしもさつきから尻がでそうなけれど又お
とかゑら□と門ばんが起るかとおもふて腹でころして
すか尻をたんとおとした袖「ア、どうりでなんじや臭い
とおもふていたのじや子「イエ〜か、さん此かざハわ
しの尻ばかりじやないお前もすか尻をおしたナエ、くさ
エ、くさ□袖「ア、ほんにさうじやわしも今ぬくいへが
でたコリヤ二人の尻が一所になつてどゑらいくさいナ
ア子「おや子が屋しきの(12ウ)内へは入て尻たれる
とハゑらいごく道じや袖「なんのまア極道どころか侍が
礼をいふわいなア子「なんでじや袖「おや子尻御苦ろ
う子「ソリヤ何のことじや袖「お役目御くろうといふ口
あいじや子「コレ〜そんなこといふていづにモフ早う
門の内へは入てやりんか袖「サアわしも氣がせくけれど
いまの尻のかざがのかぬよつてそれで見合しているの
じや子「いつたいすか尻ハくさいものじやといふけれど
けふのやうなくさいへは(13オ)生れてからはじめて
おとしたのじや袖「ソリヤおまへけふの尻ハ一生けん命
の尻じやよつてくさいはづじや子「か、さんソリヤどふ
してじやエ袖「これかほんまに 落「あだちのさい(い

たちのさいて) 文尻^{もんぺ}じや
○紅^{べに}ほかし 〈梅^{うめ}づか門^{かど}のこしらへにてしようがとはじかミをもつてで、)

カブク「ア、降^{ふつ}たる雪^{ゆき}かなソレ雪^{ゆき}ハが毛^{もう}に似^にて (13ウ) とんでさん^{さん}乱^{らん}すといへりわれハどくしやうに酔^{まう}て無^む茶^{ちや}なさんざいするボケ^{ぼけ}テイやモフこの間^{あいだ}から四五日^{さけ}も酒^{さけ}につかりて居^ゐたのでさつ^なはり何^{なに}もくへぬそこでまだしも此^{この}紅^{べに}しようがじや是^{これ}がどふも口^{くち}あたりがよいテア、おれハ斯^{かう}した所^{ところ}ハ梅^{うめ}津^つかもんかとおもふた^らりヤト〈べにしようがをたして見^みせて〉落^{おち}「梅^{うめ}ず半^{はん}ぶん(かもん)じや
○京^{きやう}がの子^こ (14オ) 〈めくらほうしのなりにてふかそでのむすめにて)

「これハ〜ミない、合^あしてわたしにこんなふり袖^{そで}きせてニ〇カして見^ませ舞^{まい}をまへとそバからはやしなさるが目くらつかまへてそんなこといふのハ無^むりといふ物^{もの}じやしかし斯^{かう}なつたらモノやけ^けじや向^{むか}ふ見^みずにやりませうト〈これにて道^{みち}成^{なり}寺^{でら}のさミせんになる〉哥^{うた}「ア、□ら〜と(さくら〜と)さぐられて(うたわれて)いふてた(14ウ)もとの立^{たつ}てぶらり(わけふたつ)。つゑないは(つれなくハ)たゞうろ〜と(うか〜と)。どふでもめくら(おとこ)ハどくしやうな(あくせうな)。めくら(あつ)のそだちハふじゆうな(はすハな)ものじやエ。ボケとはどふでござり升^{しやう}ア、こんなまいはどなたもわかりますまひソリヤわからぬはづじやこれかほんの落^{おち}「盲^{もうじん}人の(とうじんの)けいご(ねごと)といふのじや

○水^{みづ}かゞミ 〈ぶさいくなおんなのこしらへにていう〜と出て)

「わたしとしたことがいつから(15オ)髪^{かみ}をゆわぬやら風^{ふう}呂^{りよ}へもながいこといはず此^{この}マアゑらいあかだからけでヲ、きたなこれでは男^{おとこ}がほれぬはづじやとかく女^{おんな}ハ身のたしなミがかんじんぢやといふのに我^{わが}かほも見^みぬといふハこれがほんまの落^{おち}「鏡^{かぐみ}(わがミ)しらずといふのじや

○あこぎ (15ウ) 〈平治のすがたにてなわざれをひいて出て)

カブク「スリヤ貴^きでんが平^{ひら}がはらの治^{じろ}郎^{らう}蔵^{ざう}どのか繩^{なわ}(なハ)これまでひい(きい)てハゐれどト〈なわをなふまねして〉落^{おち}「のふた(あふた)ハ今^{いま}がはじめ

○夏^{なつ}の夕^{ゆふ}部^べ 〈このミのなりにてうちわとかミくづかごをおうて出て)

「ヤレ〜今^{こん}夜^やはむし〜とあついはんじやこんな晩^{ばん}ハかくべつに落^{おち}「か^かが負^おて(蚊^かが多^おて)どふもならん(16オ)○後のまつり 〈いくさ人の出^い立^だにて)

「サアおれが斯^{かう}して海^{かい}岸^{がん}へ出^いかけたらアメリカでも日^ひ和^{わり}

でもフランスでも天^{てん}氣^きでもイギリスでもきり〜すでもヲロシヤでもおろしでも此^{この}鐘^{やり}先^{さき}でたつた〜うちだといつもこいつもそこ異^い国^{こく}(うごく)などいふたところがコリヤふねも何^{なに}もないがハ、ン(16ウ)これでは落^{おち}「唐^{とうじん}人^{にん}(とほに)いんでしもふたか

○かねくじら 〈物^{もの}ざしを大小^{たいせう}にさしてさふらいのおも入^いにていづ)

「ナニ寸^{すん}尺^{しやく}あたらぬこの反^{たん}物^{もの}今^{いま}身^みが手^てにかけてたち切^{きつ}てくれんヤア〜物^{もの}ざしハいづれにあるハ、アト〈つバにしてある茶^{ちや}だいとおしへ〉落^{おち}「茶^{ちや}台^{だい}ま(たゞいま)さんじ升

5. 崩し字学習教材としての検討

本稿の成果は大阪大谷大学教育学部における授業(「学校教育特論(言語)」)の中で得られたものである。本授業内で得られた受講生の感想は下記の通りである。補助的に「みを」を用いることで、崩し字学習を自主的に進めることができたようである。また、本稿で扱った『俄の種本』は、虫食いや汚れが多くみられたが、とりわけ大きな問題となることなく、翻刻、解釈が行えたとみえる。「みを」と近世の版本の相性がよいため、アプリケーションを用いながら、崩し字に親しむことができたようである。

・ (「みを」を使った感想) かなり正確に検出されると感じました。小さすぎる文字や、似た文字があるものは違うものが出てくる場合もありましたが文脈から判断してデータベースから探すことができました。

・ まず「みを」を用いて大まかな翻刻を行い、その上で日本語がおかしい箇所を重点的に調べて正しい訳に直すという手順が最も良いと思った。翻刻の手順がスムーズになり、少しずつ自分自身でも訳せるようになるうちに楽しくなってきた。

・ 翻刻した後の解釈を考えるとところが難しかったと感じました。特に最後の落ちでは何と何がかけているのかを理解するまでに時間がかかりました。

一方で、下記のような感想も得られている。

・ うまくいくかわからないけど、初めてのことに挑戦することを経験し、これを教職に生かしていきたいと思いました。また翻刻をしていくなかで自分たちなりの答えを見つけていくことがとても楽しいと感じたので、子どもたちにも自分なりの考えを持たせられるよう授業がしたいです。

今回は、未翻刻の資料を扱ったため正確な翻刻が予め用意されているものではなかった。しかし、むしろそのことが学生にとっては楽しさの1つに繋がっているようであった。

大坂俄資料は、未翻刻のものが多く、これからもこのような学習を進めることは可能であると考えられる。また、(資料性の検討は必要であるが) 翻刻・テキストデ

ータ化を進めることで、近世後期上方語研究に資することにも繋がる。今後も継続して行っていきたい。

注

- 1) 『原色浮世絵大百科事典』第2巻、大修館書店、1982年、p.44.

(2023年3月1日 受理)